慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	レーモン・ルーセル『新アフリカの印象』第二歌・解題 (1)
Sub Title	Raymond Roussel, Le chant II des Nouvelles impressions d'Afrique, la traduction et une interprétation (1)
Author	新島, 進(Niijima, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.76 (2023. 3) ,p.1- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20230331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／This content is protected by the Japanese Copyright Act

レーモン・ルーセル
『新アフリカの印象』第二歌・解題（1）

新　島　　進

レーモン・ルーセル（1877 ～ 1933 年）といえば、その独自の創作方法〈手法〉を用いた小説家として知られ、もっとも読まれている作品についても〈手法〉が用いられた二つの長篇小説、すなわち『アフリカの印象』（1910 年）、そして『ロクス・ソルス』（1914 年）ということになろう。畢竟、〈手法〉と〈手法〉作品、そして〈手法〉の存在を明かした文学的遺書「いかにして私は自作のいくつかを書いたか」（1935 年、死後刊行）がなければ、その文学装置が生み出したあまりに奇想天外な世界がなければ、ルーセルが生前、シュルレアリストたちから――そのルーセル理解については検証を要するものの――注目を集めることはなかったであろうし、あるいは本人自らが予言したとおり、1960 年代から今日に至る「死後の開花（un peu d'épanouissement posthume）」[1] を果たすこともなかったであろう。だが、その文学的営為全体を見渡すならば、ルーセルとはむしろ詩にはじまり詩に終わった詩人であった。そしてその詩作に〈手法〉は用いられていない。ルーセルは「私の詩の著作、『代役』、『眺め』、『新アフリカの印象』が、この方法［＝〈手法〉］と全く無関係なのは言うまでもない」[2] と殊更にそれを断じて

1）「今のところ私には、私の本が、死後いくらか成功を博するだろうという希望をあてにするしか手がない」レーモン・ルーセル「私はいかにして或る種の本を書いたか」、ミシェル・レリス『レーモン・ルーセル――無垢な人』岡谷公二訳（ペヨトル工房、1991 年）所収、147 ページ。これが同覚え書きの末尾。

2）同、133 ページ。

いる。

〈手法〉が文学や言語に対して深遠かつ現代的な問いを突きつけたことの重要性は揺るがない。また二大長篇に、やはり〈手法〉作品である二つの戯曲『額の星』（1924 年）、『無数の太陽』（1926 年）を加えた 4 作品がルーセルのなかで比類の面白さを有することも確かだ。だが、ルーセルのすべてを決定したあの出来事、19 歳のときに訪れた〈栄光体験〉は、韻文作品『代役』（1897 年）執筆中に起きたのであり、それは自らがユゴーに匹敵する天才詩人であるという絶対的確信を得るという体験であった。このとき〈手法〉は発明されていない。その後の盛んな創作活動も、ただ〈栄光体験〉の再現を追い求めてのことであり、それはつまり〈手法〉とは「全く無関係」の韻文を書き続けることであった。そもそも〈手法〉とは 1900 年頃、兵役にあったルーセルがおそらくは無聊を慰めるために書いた短篇に端を発しており、ある種の箸休めと思しく、そこから直接、散文に転じることもなかったのである。こうして未発表かつ未完成の『セーヌ河』や『婚姻』（ともに 1900 年代に制作）、あるいは発表された『眺め』（1904 年）といった膨大な量の韻文が書かれる。だが、それが正当な評価を得られないと、つまり詩作による〈栄光体験〉の再現が失敗に終わると、「やっと三十才頃」[3]（1908 年頃）、ルーセルは「ごく若い頃」[4]（つまり 1900 年頃）に書いた短篇を思い出し、ついに〈手法〉を用いた「ナノン」（1907 年）といった短篇、ついで長篇『アフリカの印象』の執筆にとりかかるのだ。本人は〈手法〉によって「わが道を見出した」[5] とするが、上のような経緯を見るにつけ、〈手法〉の使用とは、詩が認められないなか、文学的栄光を摑むためにすがった妥協の産物とできなくもない [6]——とはいえ、こうした事例は文学史において珍しいことではないだろう。劇作家として芽が出ず、科学知識を盛りこんだ冒険

3）同、139 ページ。
4）同、108 ページ。
5）同、139 ページ。
6）このことについては拙文「師弟の邂逅」、新島進編『ジュール・ヴェルヌとフィクションの冒険者たち』（水声社、2021 年）でも指摘をおこなった。

小説で一世を風靡したジュール・ヴェルヌ、本格推理ものを目指すも、むしろ変態性で本領を発揮した江戸川乱歩。

実際、ルーセルは『ロクス・ソルス』完成後の 1915 年には早くも韻文に戻っている。その作品こそが約 13 年後の 1928 年に執筆をやめ、死の前年、1932 年に発表された『新アフリカの印象』である。「いかにして〜」を除けば、ルーセルが最後に生み出した作品だ。詩人はたった 1277 行しかないこの詩篇のため、制作にトータルで 7 年、詩句の点検に 5 年もの歳月をかけ[7]、さらに「丸々一生を費やしても、この点検は終わるまいという印象を抱き、仕事を続けるのをやめた」[8]。そして以降、文学に見切りをつけたと思しく、最晩年にはチェスに没頭して余生を過ごす。つまりルーセルの代名詞である〈手法〉を用いた散文作品は、〈手法〉使用以前の詩作品と、〈手法〉を用いていない韻文『新アフリカの印象』に挟まれた括弧のごとく、制作にかけた年数的にも、総分量的にも、決してルーセルの主要な仕事ではないのである。あるいは、そもそも〈手法〉自体、ルーセルがそれを「脚韻に近い」[9] と表現しているように、ある種の詩作と考えることもでき、その意味でルーセルは押韻しかしていなかったともいえる。

だが、ルーセルにとっては悲劇的なことに、あるいはそのこと自体も『新アフリカの印象』で謳われているが、人の、芸術家の人生は矛盾に満ち、ルーセルの詩篇は〈手法〉が用いられた散文作品に比べて読者に恵まれてきたとはいい難い。宜なるかな、『アフリカの印象』や『ロクス・ソルス』に夢中になった読者が――筆者もそのひとりだが――『代役』や『眺め』を手にしても、そこに〈手法〉作品同様の面白さを見いだすことはまずないであろうから。そこにあるのは、前者ならばひたすら、ただひたすら続くニース

7）「ところで、1915 年の冬から 1928 年の秋までに経過した 13 年半から、今話した 5 年間［＝詩句の点検にかかった時間］と、『額の星』と『塵のように無数の太陽』を書くために費やした時間を引き去るならば、公表したような形の『新アフリカの印象』を制作するのに、7 年を要したことになる」レーモン・ルーセル、同上、146 ページ。

8）同。

9）同、128 ページ。

のカーニヴァルにおける山車の描写であり、後者ならば、ただひたすら続く浜辺の光景の描写であり、そうした詩篇には、死体を薬品で動かす万能博士も、ブロンドのかつらを被って「ファウスト」のマルガレーテに扮する黒人王も登場しない。ミシェル・フーコーは『眺め』に魅了され、以前よりルーセルの読者だったアラン・ロブ＝グリエ作品との接点を見抜いてルーセルを発見したが[10]、これは稀な例であろうし、さすがの審美眼といえる。

だが、そんなルーセルの詩篇のなかでも『新アフリカの印象』は、〈手法〉作品を経たあとの非〈手法〉作品であり、偏執的な描写を旨とする他とは趣が異なる。〈手法〉作品とはまた別の面白さがある。にもかかわらず『新アフリカの印象』は、それにふさわしい数の読者を獲得しているとはいえまい。多重括弧の使用と難解さとが喧伝されるばかりである。また、ジル・ドゥルーズ『意味の論理学』（1969 年）、『批評と臨床』（1993 年）における「表層」の詩人としてのルーセルへの言及や、そしてもちろんフーコーの『レーモン・ルーセル』（1963 年）は今なお日本において議論の対象となっているが、そうした論考では、ドゥルーズ論やフーコー論であるから当然とはいえ、ルーセル作品それ自体が、とりわけフーコーが熱心に論じた『新アフリカの印象』がほとんど顧みられない恨みもある。ウリポのメンバーであるイアン・モンク、あるいはマーク・フォードによる英訳、酒詰治男、粟津則雄による邦訳[11]があるにもかかわらずである。

10）ミシェル・フーコー「ある熱狂の考古学」北山研二訳、「夜想」27（ペヨトル工房、1990 年）所収を参照。

11）Raymond Roussel, *New Impressions of Africa*, Translated by Ian Monk, Atlas Press, 2005. Raymond Roussel, *New Impressions of Africa*, Translated by Mark Ford, Princeton University Press, 2012. 酒詰治男氏による邦訳は第一歌が「「新アフリカの印象」註解」（甲南女子大学研究紀要 16、1979 年）、121–153 ページ。現在、甲南女子大学学術情報リポジトリよりダウンロード可。第二歌が「レイモン・ルッセル著『新アフリカの印象』註解（2）」（甲南女子大学ヨーロッパ文学研究 23、1999 年）、17–44 ページ。第三歌と第四歌が「レイモン・ルッセル著『新アフリカの印象』註解（3）」（甲南女子大学ヨーロッパ文学研究 24、2000 年）、32–50 ページ。粟津則雄訳は第三歌のみで「レーモン・ルーセル」、『シュルレアリスムの詩――シュルレアリスム読

そのフーコーをはじめ、そしてもちろん本稿筆者も、『新アフリカの印象』を読むルーセリアンの必携書が、最初期のルーセル研究者であるジャン・フェリーがおこなった同作品の解題『レーモン・ルーセル研究』とその続編である[12)]。他の文学テクストに増して『新アフリカの印象』の受容にはこうしたサブテクストが必要なのだ。本邦においてもそうした杖があれば、この詩篇が持つ難解さの真の意味が明らかになるはずだ。フェリーの尽力もあり、詩篇中、解釈ができない詩句はごくわずかであり、その難解さは、詩句の意味がとれないといった意味での難解さではない。同様に多重括弧の使用は確かに特異ではあるが、それはこの詩篇の特徴のひとつに過ぎないだろう。フーコーについては、やはりルーセル論を含む『狂気・言語・文学』[13)]が 2022 年に訳出され、日本でのルーセルへの注目がふたたび高まるであろうし（そう期待したい）、ピエール・バザンテによる『新アフリカの印象』の草稿研究も数年前に発表された[14)]。こうした機運のなかで『新アフリカの印象』の試訳と、とりわけその解題に重きを置いた今回のプロジェクトを始動することにした。なにより、この「シン」の面白さを共有したいという思いをこめて。

初回にあたる本稿では『新アフリカの印象』全四歌のうち第二歌の試訳と解題を試みるが、分量の関係で二回に分載する。第二歌には〈とり違い〉のセリーと称される（セリーについては後述する）、『新アフリカの印象』最長の、それも群を抜いて長いセリーがあり、このセリーだけで第二歌全体の約 6 割を占め、第二歌自体を『新アフリカの印象』で最長のパートにしている。よって第二歌を〈とり違い〉のセリーとそれ以外のパートで分けることが合

本 1』（思潮社、1981 年）所収、150–154 ページ。

12）Jean Ferry, *Une étude sur Raymond Roussel*, Arcanes, 1953. Jean Ferry, *Une autre étude sur Raymond Roussel*, Collège de Pataphysique, 1964.

13）ミシェル・フーコー『狂気・言語・文学』阿部崇、福田美雪訳（法政大学出版局、2022 年）。

14）Pierre Bazantay, *L'Etrange usine - Analyse et transcription des manuscrits retrouvés de* Nouvelles Impressions d'Afrique *de Raymond Roussel*, Presses Universitaires de Rennes, 2019.

理的と考え、本稿ではまず〈とり違い〉のセリー以外の詩行を扱い、次回、本丸ともいえる〈とり違い〉のセリーをとりあげることにする。

『新アフリカの印象』と第二歌の構成

ルーセルは『新アフリカの印象』の成りたちを以下のように説明している。

> 『新アフリカの印象』は、描写部分を含むはずだった。それぞれのチューブの幅が二ミリで、目にぴったり付くように作られていて、レンズの部分に写真が嵌めこまれている双眼鏡形の垂れ飾りが問題であった。写真の一枚は、カイロのバザール、もう一枚はルクソル河岸のものである。
>
> 私は、この二つの写真を、韻文で描写した（要するにそれは、私の詩『眺め』の正確なやり直しであった）[15]。

エジプトを、つまりはアフリカをふたたび描いているのだから、タルーこそ登場しないものの、本作は確かに「シン」を冠するにふさわしい。全篇アレクサンドランで書かれた詩篇は四つの歌からなる。第一歌は全229行で副題は「ダミエット。聖王ルイが囚われていた家」。第二歌は全644行で「ピラミッドの戦場跡」、第三歌は全172行で「舌が血を出すまで舐めると、黄疸が治る円柱（ダミエット近郊、アブル＝マアテック回教寺院）」、第四歌は全232行で「平底船（ダハビヤ）から眺めるロゼッタの庭園（カイロ近郊）」とあり、各歌においてそれぞれエジプトの観光名所と、そこで起きた歴史的事件、故事、風景が想起されている。だが、たとえば第二歌では確かに冒頭で1798年のピラミッドの戦いに勝利したナポレオンの雄姿が想起されるも、詩句はたちまち脱線をはじめ、さらにその脱線の脱線がおこなわれ、そのたびに一重括弧のなかで二重括弧が開くといった具合に多重括弧が開かれ、最終的には五重括弧までが用いられる。つまりその最深部では詩句が

15）レーモン・ルーセル、同上、145ページ。

「(((((……)))))」と囲われる。さらに詩句が本文から脚註へと移動することもあり、そこでもアレクサンドランと押韻が維持され、多重括弧もひき続き用いられる。ミシェル・レリスの証言では、ルーセルは当初、括弧ではなく「多色のインクで印刷したいと望んでいたらしい」[16)]。また、初版のルメール版で詩句は4ページ枚に右ページにしか印刷されていない。その4ページ（表裏2葉分）は昔のフランスの本にあったように上部が裁断されておらず、いわゆる袋とじになっており、その内側のやはり右ページに、ルーセルが画家アンリ・ゾー（Henri-Achille Zo, 1873–1933年）に依頼して描かせた挿画が配されている。よって挿画も4ページ枚に、計59葉が収録されている。詩句とイメージの綜合も『新アフリカの印象』の重要な要素であり、この点についてものちに検討をおこなう。

第二歌の形式を整理する。括弧内を1aなどと表記したうえで多重括弧を残し、地の詩句0の原文を書き出すと以下のようになる。数字は1であれば一重括弧内の詩句を意味し、一重括弧は二回開くため1aと1bとがある。二重括弧以降も2, 3, 4, 5と同様の表記をしている。脚註の詩句は註（note）の略nとし、第二歌では二重括弧2aと、三つめの三重括弧3cの詩句から計二つの脚註が伸びている。脚註を示す記号はルメール版ではともに1という数字が用いられているが、本稿では便宜上、nI, nIIとする。よって第二歌は0, 1a, 1b, 2a, 3a, 3b, 3c, 4a, 4b, 4c, 5a, 5b, 5c, nI, nI-1a, nI-1b, nI-1c, nI-1d, nI-2a, nIIからなる20のブロックに分けることができる。

Le Champ de bataille des Pyramides

1　Rien que de l’évoquer sur ce champ de bataille,
2　A l’âge où le surtout — le long surtout à taille —
3　Et le *petit chapeau* — desquels nous extrayons
4　Quel que soit notre bord d’intimidants rayons —

16）ミシェル・レリス「レーモン・ルーセルに関する資料」、ミシェル・レリス、同上、17–18ページ。

5–604 (1a((2a(((3a)))(((3b)))(((3c((((4a))))

nI(1a)(1b)(1c)(1d((2a))) nII

((((4b(((((5a)))))(((((5b))))) (((((5c)))))))))((((4c))))))))))

605–607 Surtout gris, chapeau noir (1b)

608 Mis par lui jusqu'au bout sur son rocher accore,

609 Ne magnifiaient pas sa silhouette encore,

610 Fait que, méditatif, on oublie un moment

611 L'Égypte, son soleil, ses soirs, son firmament.

このとおり一重括弧の外側にある地の詩句は全 644 行中（本文が 611 行、二つの脚註の詩句がそれぞれ 25 行と 8 行）たった 8 行半（605 行目は半句）であり、つまり副題にもかかわらず、ピラミッドの戦場跡とナポレオンについて語っている箇所は第二歌全体の約 1.3％を占めるに過ぎない。戦場にいるナポレオンのかつての姿を思い浮かべると、目の前にあるエジプトの光景も一瞬、忘れ去れるほどだ、と謳われている。そして残りの行、つまり詩篇のほぼすべては括弧内で増殖する脱線である。フーコーは第二歌をこう説明している――「これは変化の歌だ――形の変化と恒常性、時間の中の可動性、相矛盾するもの同士の衝突。だが、かくも多くの多様性を通して、事物は、目だたぬ形で、維持されているのだ」[17]。

また、第二歌には先述のとおりの形式で 29 葉（第一歌からの通し番号で 12–40）の挿画が組みこまれているが、このうち 12–17, 35–40 にあたる 12 葉が〈とり違い〉のセリー以外のパートにあてられた挿画となる。試訳では各挿画に対応する詩句にゾーの略として Z1 のような記号を振り、巻末に画像を並べることとした。また、ルーセルが探偵事務所を通してゾーに与えた各挿画についての指示をキャプションとして訳出した[18]。これは袋とじ形式

17）ミシェル・フーコー『レーモン・ルーセル』豊崎光一訳（法政大学出版局、1975 年）、196 ページ。

18）Laurent Busine, *Raymond Roussel Contemplator enim*, La lettre volée, 1995

のルメール版を踏襲していないが、挿画の順番についてはその初版に準拠している。よって本稿では末尾に置かれている脚註の詩句に対応する挿画 Z14 が最初から三番目の挿画となっている。

括弧内の脱線の大半は、ジャン・フェリーが「セリー（série）」と呼び、フーコーが「展示平面（plage）」呼んだ一連の詩句の羅列である。フーコーが用いた呼称は、ルーセルが『新アフリカの印象』をその書き直しだとし、浜辺（plage）の描写がおこなわれる詩作品『眺め』への目配せになっている。セリーはなんらかの類例の列挙である。たとえば最初の〈ひき出す〉のセリーでは、ナポレオンの佇まいから人々は「凄みのある光をひき出す」と謳われ、そこからナポレオンを離れ、「なにかをひき出す（extraire）」例が 3 つ列挙される。本稿ではセリーを導く合図となる詩句、ここでは「凄みのある光をひき出す」を、ビリアード用語を愛好したルーセルにちなんで「キュー」と呼称する。このように『新アフリカの印象』は、強引な連想によって提起されるキューに導かれ、セリーが派生することで次々に脱線をする。第二歌においては、筆者の分類では以下の 7 つのセリーを確認することができる（これはフェリーやフーコーの分類とは異なる）。

セリー番号	セリー名	構成上の場所	例の数	行数
セリー 1	ひき出す	一重括弧の a パート（1a）	3 例	7
セリー 2	十字	二重括弧の a パート（2a）	5 例	約 15
セリー 3	縮まるもの	五重括弧の c パート（5c）	39 例	41
セリー 4	とり違い	四重括弧の b パート（4b）	207 例	約 416
セリー 5	気まぐれな運命	四重括弧の c パート（4c）	26 例	32
セリー 6	矛盾した考え	三重括弧の c パート（3c）	30 例	約 58
セリー 7	不当な成功	脚註 II の地の詩句（nII）	2 例	6

括弧の配置とセリーを綜合し、第二歌の構成をまとめると以下のようになる。

を参照。

●地の詩句：セリーはなし。

●一重括弧（）：地の詩句から二つの一重括弧が開かれる（1a, 1b）。1a は〈ひき出す〉のセリー（3 例）をなす。

●二重括弧（()）：一重括弧（1a）からひとつの二重括弧（2a）が開かれ、〈十字〉のセリー（5 例）をなす。

●三重括弧（(()）：二重括弧（2a）から三つの三重括弧（3a, 3b, 3c）が開かれる。3c は〈矛盾した考え〉のセリー（30 例）をなす。

●四重括弧（((()))）：三重括弧（3c）から三つの四重括弧（4a, 4b, 4c）が開かれる。4b は〈とり違い〉のセリー（207 例）をなす。4c は〈気まぐれな運命〉のセリー（26 例）をなす。

●五重括弧（(((()))）：四重括弧（4b）から三つの五重括弧（5a, 5b, 5c）が開かれる。5c は〈縮まるもの〉のセリー（39 例）をなす。

●脚註 I 地の詩句：二重括弧（2a）から脚註 I（nI）が開かれる。セリーは形成しないが、キューからの展開はある。

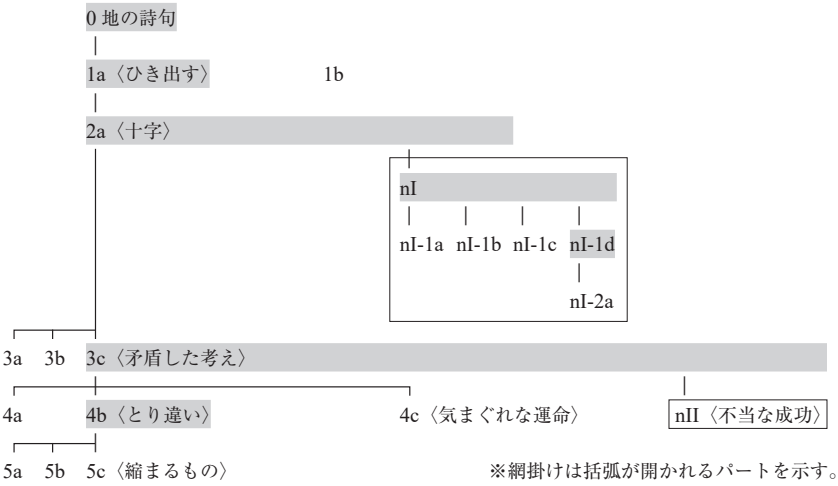
●脚註 I 一重括弧（）：脚註 I（nI）から四つの一重括弧（nI-1a, nI-1b, nI-1c, nI-1d）が開かれる。どれもセリーは形成しない。

●脚註 I 二重括弧（()）：脚註 I 一重括弧のひとつ（nI-1d）からひとつの二重括弧（nI-2a）が開かれる。セリーは形成しない。

●脚註 II 地の詩句：三重括弧（3c）から脚註 II（nII）が開かれ、〈不当な成功〉のセリー（2 例）をなす。

これを樹形図状にまとめると、以下のとおりである。

本稿では以下、〈とり違い〉のセリーを除く 6 つのセリーと脚註 I について読解をおこなう。また、フーコー『レーモン・ルーセル』の読者のために、各セリーにおけるフーコーの説明を引用する。セリー／展示平面の分類についてフェリーは〈縮まるもの〉、〈とり違い〉、〈気まぐれな運命〉、〈矛盾した考え〉のみをセリーとし、フーコーは〈ひき出す〉を展示平面とはしていない。さらにフーコーはキューとなる詩句も列挙の最初の例として数えていることなどがあるため、本稿とは例の数がずれている場合がある。いずれも便



宜上のことで本稿筆者に自身の分類へのこだわりがあるわけではない。また、多くの詩句でフェリーの読解が導き手（メンター）になったことを付記する。そのほかの情報源は基本的に平凡社百科事典、ラルース Grand dictionnaire universel du XIXe siècle をはじめとする事典類、また辞書 Littré である。なお筆者が関心を寄せるジュール・ヴェルヌ作品との関連については主要な事項のみ脚註で指摘をおこなう。

セリー 1〈ひき出す〉のセリー

先述のとおりのキューから、なにかをひき出す例が 3 例列挙される。フェリー、フーコーともこれをセリー、展示平面とはしていない。

1. ニュートンは落ちたリンゴから万有引力をひき出す。2. 人は寓話や小話から教訓をひき出す。『寓話』（1668–1694 年）で知られるラ・フォンテーヌはルーセルがしばしば引用する詩人のひとり。3. 人は原始的な案山子から鳥の愚かさの証拠をひき出す。

セリー 2〈十字〉のセリー

セリー 1 の案山子（Z12）が、木を十字に組んだだけのものであることを

キューとし、十字の形をした物の例が5例列挙される。フーコーの説明――「第一の展示平面（5品目）――どれだけのそれぞれ異った品物が、非常に変化に富んだ意味を伴って、十字のイマージュを再現しうるであろうか？」[19)]

1. 南十字星[20)]。2. 十字架。3. 暖炉に刻む十字。珍しいことがあると暖炉に十字を刻む習慣、またその言い回し（faire une croix à la cheminée）から。ここでは妬み深い人が他人の成功を認めるという珍事があったので。4. 司祭が信者の額に記す灰の十字。復活祭の40日前、その前週の「灰の水曜日」におこなわれるカトリックの儀式（Z13）。5. レストランで肉を切り分ける給仕が、刃を研ぐためにクロスさせるナイフ（Z40）。「胃が踵にある（avoir l'estomac dans les talons）」は「空腹」の意。

セリー3〈縮まるもの〉のセリー

セリー2におけるレストランへの言及から、その店主に話題が移る。彼は、人が彼のあら探しをしているとき、壁に聞き耳をたて、そこで挙げられている自身の短所や悪癖を知るが、それらは甘い目を通して小さくされるというキューから、縮まるものの例が39例列挙される。フーコーの説明――「第二の展示品目（ママ）（40品目）――どれだけの物が、同一のものであり続けながら、プロポーションを変え、寸法を縮めるであろうか？」[21)]

1. 正午になって短くなる、日時計にかかる影（Z15）。

2. 寒さで縮まるメートル原器。メートル原器はメートルの旧標準器で、摂氏0度で1mになるようにつくられているが、金属なので冷却すると収縮は免れない。フランスでつくられ、1889年に承認されたメートル原器は

19）ミシェル・フーコー、同上、196ページ。

20）ヴェルヌに南アフリカを舞台とした『南の星』（1884年）という長篇がある（ただし実際の作者はパスカル・グルーセ）。同作の最後の語は、タイトルの「南の星」（Étoile du Sud!）という語の反復だが、ルーセルの戯曲『額の星』も同様にタイトルの「額の星」（l'étoile du front!）で終幕となる。

21）ミシェル・フーコー、同上、196–197ページ。

1960 年まで国際原器として使用されていた[22)]。

3. 犬の落とし物を踏まないよう、捲られるズボン。

4. トイレットペーパーとして使われる新聞紙。使用時、適当な大きさにちぎられる。〈矛盾した考え〉のセリーにも言及あり。

5. 修理が必要なほどすり減ったブーツの踵。

6. 割礼で包皮の先がとり除かれるペニス。

7. テーブルに並べられるごとに減っていく皿の山。

8. 散髪が終わり、背の高い客のために伸ばしてたヘッドレストが元に戻される床屋の椅子。温かいのは客が座っていたから。

9. 除隊前の老兵が毎朝切っていくメートル尺。除隊百日前を祝う「百日おじさん」(Père cent) という風習が軍にあり (今日ではバカロレア受験百日前の高校生がおこなう)、この日から対象者は毎朝、メートル尺を一センチずつ切って残りの日数を数える。

10.『アフリカの印象』のガラで上演される『ロメオとジュリエット』。『アフリカの印象』のガラでは、舞台女優アディノルファが近年発見した『ロメオとジュリエット』の異本 (もちろん架空の設定) に基づいた同作の上演がおこなわれる。演じるのは、黒人王タルーの息子のひとりカルジとその女友だちメイスデルであり、ともに 7 歳なのでロメオとジュリエットよりも小さい。二人は出演料なしに演じる。エジェールはタルーが治めるポニュケレ国の首都。

11. 舞台上で折られる剣[23)]。

---

22) フェリーはメートル原器について、ヴェルヌ『エクトール・セルヴァダック』(1877 年) からの影響を指摘している (Jean Ferry, *Une étude sur Raymond Roussel*, ibid., p. 57. 以下、同書を F と略す)。確かに第 2 部 8 章で、天文学者パルミラン・ロゼットが複数の硬貨を用いて度量衡を定めるシーンがある。加えて指摘するならば、ヴェルヌ『三人のロシア人と三人のイギリス人の南アフリカにおける冒険』(1872 年) は、メートルを定めるために必要な、子午線測量をめぐる国際競争を描いている。

23) ルーセル『代役』冒頭でも舞台上の剣が問題になる。そうであれば二句続けて自作への言及となる。

12. ミサで配られるホスチア（キリストの体として信者に与えられる、聖別されたパン）は齧られると小さくなる。ヴァチカンの警護にあたるのは伝統的にスイス人衛兵。

13. 先端を噛みきられるアスパラガス。

14. 畑を耕しているとき、鋤でぶった切られるミミズ。

15. 敵の気配を察知して途中まで抜いたが、気のせいだったので刃を納める仕込み杖。

16. 譜面が置かれたので重みで下がる譜面台。

17. 子どもが座るので下げられるピアノの椅子。

18. 日毎に減っていく日めくりカレンダー。

19. 食事のあとで元に戻される、天井から吊られたランプ。おそらくシザーランプと呼称されているもの。

20. 指を切ったとき、止血のために短くして使う帯封。この解釈は自信なし。

21. 鏡に息を吹きかけたときにできる曇りはやがて小さくなる。

22. 嵐の前に畳まれる帆。リーフは船の縮帆部で、風に応じて調節する。

23. 大勢の客に対応するため、ほかの卓を横に並べて大きくしたが、客が帰ったので元に戻る丸テーブル。

24.（セーヌ？）河が増水すると、水面とアーチの部分の隙間が狭く（小さく）なる[24)]。

25. 息を吹きかけられたので小さくなる火口（Z16）。

26. 毛を刈られた犬の尾の先。血がついているのは尾がちょっと切れてしまったから。

27. 調教が済み、用済みになって外される轡鎖。縮まるのは馬の口のほうだと思うが。

24）フェリーはセーヌ河にかかるアルマ橋を想起している（F., p. 62）。クリミア戦争の戦勝記念として 1856 年に完成したこの橋の橋脚には、戦いで活躍したズアーヴ兵の像があり、この像がどこまで水没しているかでセーヌ河の水位を知ることができる。ズアーヴ兵は『アフリカの印象』に登場する。

28. 火が消えて頭が落ちるマッチ。

29. 少なくなった中身を捻り出すために巻かれる絵の具のチューブ。

30. 畳まれていた傘が、それを留めていたゴム紐のボタンが外れて開くと、伸びていたそのゴム紐が縮む。

31. 子どもが大きくなり、揺り籠をベッドに代えると、壁との隙間が縮まる。

32. 息を吹きかけて綿帽子を飛ばしたタンポポ。

33. つま先立ち（ポワント）をやめるバレリーナ。

34. 弁護士は罪を小さくする（Z17）。

35. 散水していた人が喉が渇き、ホースから直に水を飲むと、そこから出ていた水柱は小さくなる。

36. 蜘蛛が登っている糸。登れば登るだけ天井までの糸の長さは短くなる。

37. ルーレットで負けたときの、カーペットのうえのお金の山。

38. 吸ったあとの葉巻。

39. 海王星から見た太陽は、地球から見たときよりも小さくなる[25)]。

セリー4〈とり違い〉のセリー

次号掲載予定の「レーモン・ルーセル『新アフリカの印象』第二歌・解題(2)」にて。

セリー5〈気まぐれな運命〉のセリー

レストランの店主はまた、接客においてどんな幸運や不運が舞い降りてく

25）フェリーはここにおいてもヴェルヌ『エクトール・セルヴァダック』の読書体験を影響として挙げている（F., p. 64）。ただしルーセルは、ヴェルヌも参照しているカミーユ・フラマリオンの読者でもあった。むしろ『新アフリカの印象』第一歌のタイトルになっているダミエットと聖ルイ王の墓が『エクトール・セルヴァダック』第1部11章でも舞台となることが興味深い。なお『エクトール・セルヴァダック』はルーセルが生まれた1877年に刊行されており、また、「いかにして〜」でのヴェルヌ讃美でタイトルが挙げられた7つのヴェルヌ作品のうちのひとつ。

るか知れたものでないという考えに至り、運命の輪の気まぐれという文脈から、その浮き沈みの例が26例列挙される。フーコーの説明――「第四の展示平面（28品目）――同じ一人の人間の生涯、あるいは同じ一つの物の運命にはいかに多くの矛盾があることか」[26)]。

1. 富を築くも投獄される銀行家。

2. 悪事をやめて心の平穏を得た泥棒。フェリーの解釈による（F., p. 124）。

3. 袋だたきに遭う署長。ギニョールは19世紀フランスの庶民に親しまれていた人形劇の主人公。権力への諷刺。

4. 怪力を誇るもデリラに髪を切られて力をなくすサムソン。そしてペリテ人に捕らえられ、眼をえぐられ、粉挽きをさせられる（「右手を前に出して」）。旧約聖書「士師記」などで語られる逸話。

5. 砲撃で戦死する猛将テュレンヌ。テュレンヌことアンリ・ド・ラ・トゥール・ドーヴェルニュ子爵（1611～1675年）はフランス軍の元帥。数々の戦いで勝利をおさめた歴戦の勇士だったが、1675年、仏蘭戦争のさなか、ザスバッハの戦いで砲撃を受け戦死した。

6. 強い酒で至福を得る者（Z35）。アブサンはニガヨモギなどが入ったリキュールでアルコール度数が高い。下肋部は肝臓の換喩だろう。

7. お金を使い果たした放蕩息子。西欧でよく知られている、新約聖書「ルカによる福音書」中の逸話。生前分与を受けて財産を手にした息子が家を出、散財し、無一文になって家に戻るも、父親はその帰還を喜ぶ。

8. 皮算用した相続人。

9. サンジェルマン・ロクセロワ教会（聖人オーセールのゲルマヌスにちなむ）の鐘の音で安眠を妨げられたコリニー提督。1572年、サンバルテルミの虐殺の折にこの教会の鐘が鳴らされたとされる。ユグノーのコリニーも犠牲者のひとり。

10. 殺害するつもりだった皇帝アウグストゥスの友となるシンナ。コルネイユ『シンナ』（1642年）を踏まえている。シンナはある経緯から皇帝暗殺

26）ミシェル・フーコー、同上、197ページ。

を企てるが実行には移さず、皇帝も彼を許す。

11. クリスマスにプレゼントでいっぱいになるただの靴。

12. スルタンの夜伽の相手に選ばれるオダリスク。オダリスクはオスマン帝国時代、宮殿のハレムにいた女性。

13. 贋金で金持ちになる者。

14. ライオンに気に入られるダニエル。旧約聖書「ダニエル書」の逸話。陰謀によってライオンの穴に突き落とされたダニエルだが、神への信仰心から襲われることはなかった。ダニエルのもうひとつの逸話「ベルシャザールの饗宴」は第四歌で言及されている。

15. 立っただけで有名になるただの卵。コロンブスの卵の逸話。

16. 体よりも頭がおかしくなる大病人。ルールドはフランス南西部ピレネー山脈の麓にある村。1858 年、聖母マリアがこの地の洞窟近くに出現したことで（地元の少女が目撃した）カトリックの巡礼地となり、多くの病人が奇跡を求めて訪れる。ルールドは〈とり違い〉のセリーでも想起される。

17. 身分がばれて収監される偽王子。「護送車（le panier à salade）」の原義は「（水切り用の）サラダ籠」。檻のような形状から護送車の意味になった。この句では護送車の意でとった。

18. 悪魔と契約し、若返るファウスト。シャルル・グノーのオペラ「ファウスト」（1859 年）第一幕を踏まえている。メフィストフェレスはマルガレーテ（グレートヒェン）の姿を壁に映してファウストに見せ、契約を結ばせようとする。ルーセルはグノーを好んでいた。また同作は〈矛盾した考え〉のセリーで言及される「ミニョン」と同様、ゲーテ原作で、脚本を担ったのもやはりミシェル・カレとジュール・バルビエ。

19. 勢いよく回っていながら急に倒れるコマ。

20. 理想郷建設のため、すべてをなげうった裕福な発明家。

21. 栄えある手紙の蝋封となる、ただの蝋の溜まり（Z36）。

22. クイーンになるポーン。チェスでもっとも弱いコマであるポーンは敵陣最奥に侵入すると強力なコマ（普通はクイーン）に成る。

23. 鎖に繋がれるプロメテウス。人間に火を与えたためにゼウスの罰を受

け、コーカサス山脈に鎖で繋がれる。

24. かわいがられたあと、煮物になる猫。童謡「ミシェルかあちゃんの猫」を踏まえている。愛猫がいなくなり、ミシェルかあちゃんが涙に暮れていると、リュステュクリュおじさんがやって来て猫が見つかったという。猫を返す見返りを求められ、ミシェルかあちゃんがキスをあげると答えると、リュステュクリュおじさんは猫を売ってしまう（ルーセルの文脈では肉屋に）。

25. 金を盗まれるボンボン。

26. 王子の妃になるシンデレラ。

セリー 6〈矛盾した考え〉のセリー

セリー 5 の店主は、そんな運命の輪のきまぐれで途轍もない幸運が巡ってくることもあろうかと、客がどんなバカなことや矛盾したことを言ってもへつらい、それに耳を貸すものだというキューから、矛盾した考えの例が 30 例列挙される。「香炉のひと振り（un coup d’encensoir）」は「お世辞を言う」の、「帽子を持ちあげる（opiner du bonnet）」は「同意する」の意。フーコーの説明――「第五の展示平面（28 品目）――ある種の事物はそれを考えること自体が矛盾である」[27]。

1. 大金の番をする靴直しが安眠できたという考えは矛盾している。ラ・フォンテーヌ『寓話』の一篇「靴直しと金融家」を踏まえている。金に執着のない陽気な靴直しに金融家が大金を預けたところ、靴直しは猜疑心から夜眠れなくなってしまう。

2. 鏡に映った背の低い人が巨人に見えるという考えは矛盾している。鏡の枠とドルメンの形状が似ていても鏡に映る人が大きいわけではない（Z37）。

3. 腸内にサナダムシがいる人にむりやり食べさせなければならないという考えは矛盾している。サナダムシに栄養をとられているので、むしろ進んで食事をするはずだから。フランス語で「サナダムシがいる（avoir le ver solitaire）」は「つねに空腹」の意。

27）同。

4. 妻が夫に対して優しいと考えるのは矛盾している。説明不要。

5.「タイムズ」紙がトイレットペーパーとして使われないと考えるのは矛盾している。日本でも昔は……？　トイレットペーパー代わりの新聞紙は〈縮まるもの〉のセリーにも見られた。

6. イタリアとの国境にあり、気候に恵まれているマントンにいるより、寒いパリにいるほうが肺結核の治りが早く、太ってくると考えるのは矛盾している。

7. アスパラガスを食べたあと、尿の香りがよくなると考えるのは矛盾している。実際はほかの食物よりも臭う。

8. 蛙が梯子に登るかどうかは単なる気まぐれだと考えるのは矛盾している。次の日が晴れるときは蛙が梯子を登るという迷信がある。

9. 蝿がコップに入っているほうが、その水を飲みたい気持ちをそそられると考えるのは矛盾している。普通はそそられない。

10. 水銀が凍りつくほどの寒さのなか、襟を立てるのが辛いと考えるのは矛盾している。水銀はマイナス 38 度で凍りつく。

11. イタリアの形が長靴と似てないと考えるのは矛盾している。「ミニョン」(1866 年) は、ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』を原案としたアンブロワーズ＝トマのオペラ作品。その第一幕でヒロインのミニョンが歌うアリア「君よ知るや南の国」でイタリアは、「どんな季節でもミツバチが花から花へ飛んでいる」国とされている。

12. 臆病者でも、ウィリアム・テルからの決闘状ならば受けとるだろうと考えるのは矛盾している (Z38)。そんなことをしたら一撃で頭を射貫かれる。

13. ロストプチンがモスクワに放った火によって、王たちがよりいっそうナポレオンに頭を下げたと考えるのは矛盾している。1812 年、ナポレオンのロシア戦役での史実。フランス軍はモスクワに入城したが、ロシア側はすでに街を放棄しており、また、市長であったロストプチンの指示で放火をおこなった。結果、モスクワは焼け野原となり、ナポレオンは期待していた補給ができなくなった。これが転機となり、フランス軍は撤退を余儀なくされ、ロシア遠征は失敗した。なお、フランスの童話作家セギュール夫人はロスト

プチンの娘。

14. シャンパンの栓が低い天井より高い天井を貫通すると考えるのは矛盾している。経験的には確かに。

15. 月が満月に近く、明るければ、見える星の数が多くなると考えるのは矛盾している。月明かりが弱いほど周囲の星はよく見えるはず。

16. ナポレオンが好きなものから先に食べることをしない人物だったと考えるのは矛盾している。「白いパンを先に食べる（manger son pain blanc le premier）」は「楽なこと、楽しいことから手をつける」の意。戦場のナポレオンがなんでも出てきたものから先に食べたという逸話にちなむか。

17. モリエールの女学者が女中を楽しませなかったと考えるのは矛盾している。モリエールの喜劇『女学者』（1672 年）では女学者、つまり学者ぶった女性が笑いの種となるので、女中にとっては楽しいはず。

18. 先に許可を求めているのに、手紙の開封が全会一致で拒否されると考えるのは矛盾している。文脈が見えないが、先に断っているなら開けてもよいはず。

19. 黒真珠が珍しいからといって、黒鶫が珍しいと考えるのは矛盾している。「白鶫（merle blanc）」は「珍しいもの」の意。

20.「黄色のこびと」で手札がよいのに、親にならずにターンを終えようと考えるのは矛盾している。「黄色のこびと」はトランプをつかったボードゲームで、盤面の中央に黄色のこびとが描かれている。親になったほうが有利。

21. 聖マルティヌスが夏に上着の施しをしたと考えるのは矛盾している。冬にしないと意味がない。聖マルティヌスはローマ帝国時代の兵士で、のちにトゥールの司教となった人物。冬、凍えていた物乞いに自らの服をちぎって与えた逸話がよく知られる[28)]。一オーヌは約 1.2 メートル。

22. オナンが誰よりも「ギヴ・アンド・テイク」をしたと考えるのは矛盾している。自慰は自分だけ快楽を得る行為であるため。ただし旧約聖書「創世記」中の人物オナンが実際におこなったのがなんであったかは聖書にある

28）ルーセル『額の星』にこの逸話をモデルにしたと思しき挿話がある。そこでは教皇ユリウスの逸話として語られている。

とおり。

23. 変化記号の効果が、次の小節線で無効にならないと考えるのは矛盾している。変化記号の効果はナチュラルを使わずとも次の小節線を跨げば消える。

24. 夏は遊んで過ごし、冬に飢えてしまった蟬に、蟻が食べ物を分け与えたと考えるのは矛盾している。ラ・フォンテーヌ『寓話』のなかでも、もっともよく知られた一篇「蟬と蟻」を踏まえている。蟻は貸さない。元となったイソップ「蟻とキリギリス」のほうが日本では有名だが。

25.『アッティラ』が『ル・シッド』よりよく書けていると考えるのは矛盾している。ロドリーグを主人公とするコルネイユの戯曲『ル・シッド』(1637 年)は作者の出世作で、一般に『アッティラ』(1667 年)は失敗作とされている。

26. 二点間の曲線が直線より短いと考えるのは矛盾している。噂が世界を駆けめぐるならば地球が問題になっているかもしれず、であれば地球は球体なので、二点間の距離は大円距離で割りださなければならない。

27. 会議の終わりを告げる鐘が鳴っているのに、そこから議論が激しくなると考えるのは矛盾している(Z39)。これは必ずしも矛盾しないような気もするが。

28. ライヴァルを蹴落とすため、匿名の手紙で中傷するのが高貴な方法だと考えるのは矛盾している。卑怯である。

29. その匿名の手紙を、偉大なカリーノが開封することなく捨てると考えるのは矛盾している。カリーノはヴォードヴィル作品に登場する類型で、お人好しの愚か者。なので中傷の手紙なのに捨てないで噂を広めてしまう。前句と合わせてひとつの例とすることもできよう。

30. ミツバチの社会にサリカ法があると考えるのは矛盾している。サリカ法は 6 世紀頃に成立したと推定されるフランク王国の法で、王位継承から女性を除外した。ミツバチにとって女王バチがいなければどうにもならない。

脚註 I〈それでも通用する中傷〉のセリー？

〈十字〉のセリーの 5 例目で言及されたレストランのガラス張りのドアから脚註に詩句が飛び、人がガラス張りの家に住んでいれば、（すべて明け透けなので）中傷などというものはなくなるのではないかと発想されるが、とはいえ、ずっと流布し続ける中傷もあるはずだということがキューになり、月への中傷（風も火山も水もない不毛の地で、臆病な衛星）へと展開する。一例しか挙がっておらず、これはセリーとはしなかったが――フェリー、フーコーもセリー、展示平面とはしていない――キューから例が生じる形式にはなっている。かりにセリーとするならば、脚註 I の二重括弧内にある「砂漠の蜃気楼」や「悪い知らせではないかと怖くなったときの寒気」（Z14）も〈欺くもの〉のセリーとできるし、二つ目の一重括弧内の「筏の遭難者がいる」、「フィニステール（フランス最西端の県、大西洋に面している）の名を冠する地」は〈海〉の、「洗礼」、「水彩画」、「浣腸」は〈水が必要なもの〉のセリーとできる。いずれにせよ形式上の問題。

むしろ、この脚註 I には考察を要する点が複数ある。月や筏の遭難者についてはヴェルヌ作品が想起され[29]、「月」と「爪の半月」との類似性は〈とり違い〉のセリーを完全に先どりしている。また、最初の一重括弧にある「ひとつの註」（une　note）は、脱線する註への自己言及だが、ここではリサイタルが問題になっているため、楽曲の「一音」（une　note）と掛詞になっている可能性もある。

セリー 7〈不当な成功〉のセリー

〈矛盾した考え〉のセリー 28 例目で想起される栄誉への競争から脚註に詩句が飛び、そうした競争において不当な理由で勝ちとられた成功の例が 2 例列挙される。フーコーの説明――「第六の展示平面（2 品目）――或る種

29）『月を回って』（1870 年）では、当時はまだ観測されていなかった月の裏側が描写されている。『チャンセラー号』（1875 年）ほか、筏での漂流はヴェルヌ作品の主要なモチーフのひとつ。

の成功はそれらと矛盾する起源によって内部から損なわれる」[30]。

1. 審査員の多くを愛人にし、賞を獲ったピアニスト。2. 泉質よりもカジノのおかげで繁栄している温泉地。温泉地の地名には「レ＝バン」（浴場）という語がつけられることが多い。サヴォア県にある町「エクス＝レ＝バン」など。

30）ミシェル・フーコー、同上、197 ページ。

レーモン・ルーセル『新アフリカの印象』

第二歌

ピラミッドの戦場跡

1	この戦場にいるかの者を想うだけで、	↓ 0	
2	あの外套が――全身を包むあの長い外套――		
3	そして、あの「小さな帽子」が――どちらの縁にいようと		
4	私たちはそれらから、凄みのある光をひき出す		
5	(なににつけ人がひき出すのは自然なことだ	↓ 1a	
6	人はひき出す。リンゴの落下というなんでもないことから、		↓セリー 1
7	不朽の名声を人に授ける法則を [1]		
8	寓話や短篇から教訓を [2]		
9	ただの十字を立たせた、やせっぽちの案山子から Z12		
10	――手入れが悪く、陰鬱な窮乏を際だたせるだけのそれから――		
11	((十字はさまざまな姿をしているものだ！　星の集まりが	↓ 2a	↓セリー 2
12	南の空の真ん中で、南のそれを成す [1]		
13	喩え話では、私たちは皆それを背負っている [2]		
14	他人が勝ちとった正当な成功を知り		
15	世に知られることなく年老いた妬み深い人のひとりが		
16	内々には怒り狂いながらも、それを認めるとき、		
17	――頭の働きが鈍く、生来の炎をすっかり失っている、――		
18	親しい人がそれをひとつ暖炉に記す [3]		
19	例外なく、年に一度――カーニヴァルが始まると、――		
20	(((少なくとも儀式にしがみついているならば	↓ 3a	
21	そして地獄を信じ、そこに堕ちることを恐れているならば)))	↑ 3a	
22	キリスト教徒は、額に、灰でそれをつける [4] Z13		
23	意を決して（((食事に近づくことは	↓ 3b	
24	歩くことにとって、比類なき活性薬だ		
25	乗組員が秣桶のほうに帆を向けるとき、		
26	馬は空を切って進む、鞭に打たれずとも、		
27	輝かしい種馬から出た純血種のように)))	↑ 3b	
28	レストランに入るとき――絶好調である胃の		
29	正式な位置が、踵にある時間に、――		
30	しばしば、ガラス張りのドア越しに、ローストした肉の傍で [1]、		
31	十字に組まれるのが見える [5]（((店主は	↓ 3c	↑セリー 2
32	((((美食についてはいっぱしの専門家であり、	↓ 4a	

33　高価な品種の果物に鋼の刃が
34　触れるのを見て震えあがるだろう))))、　↑ 4a
35　人は、誰もが目ざとくも頭陀袋を首に掛け、
36　本人はぺしゃんこだと思っていても、望み通り膨れたポケットのなか、
37　肩甲骨のうしろに、その人個有の短所を持っていることを知っており
38　((((さらに、人が彼のあら探しをしているあいだ、その男は　↓ 4b
39　(((((人々が若者に対してそうするように。医学部は　↓ 5a
40　彼が結核に蝕まれていると診断すると
41　愛と閉じた窓を禁止する、
42　若い衆に厳しく、熟年者を敬う病ゆえ)))))　↑ 5a
43　あちらのドアや、こちらの壁で聞き耳をたて
44　(((((声は実際、薄い壁やドアを　↓ 5b
45　越えていくことを忘れないでおこう)))))　↑ 5b
46　丸裸にされた己の短所や、悪癖や、欲望を知るやいなや、
47　自身の甘い目を通して、それらは小さくされる
48　(((((たとえば――昼頃、胃が給与を要求している　↓ 5c
49　ことを示している日時計にさす影[1] Z15　↓セリー 3
50　――認めようとしなかったようだが、凍結したメートル原器[2]
51　――糞に挑み、捲りあげられたズボン[3]
52　――小さな部屋の、穴の開いた板のうえの新聞[4]
53　――踵が変形している、応急処置を要するブーツ[5]
54　――ラビが注意しながら爪の一撃で頭から取るもの[6]
55　――食器を並べているときの、下男の皿の山[7]
56　――床屋が動かす、温かい背もたれ[8]
57　――老兵が、起床時に持っているメートル尺[9]
58　――二人の子どものパントマイマーが、神ノ愛ノタメニ無料デ演じる
59　エジュールでのガラにおけるロメオと、ジュリエット[10]
60　――舞台上で、騎士が太腿で折る、敗者の鉄剣[11]
61　――スイス人が涎を垂らしながらミサに導くパン[12]
62　――歯で噛んだあと、捨てられたアスパラガス[13]
63　――鋤が役にたっているときの、致命的な事故に遭ったミミズ[14]
64　――危険が間違いだったときの、半分抜かれた仕込み杖[15]
65　――開いたばかりの譜面が置かれた、とても高い譜面台[16]
66　――幼いピアニストが押すときの、ネジつきの椅子[17]
67　――かつては肥えていた、古い日めくりカレンダー[18]
68　――スープの後に戻す吊り下げランプ[19]
69　――指を切るときの、葉書の帯封[20]
70　――息がこびりついた、鏡を悲しませる染み[21]
71　――最初の大きな雷に、リーフのついた帆[22]
72　――大晩餐会のあと、ふたたび円くなった卓[23]
73　――人々が見守る、水が猛烈にあがるアーチ橋[24]

74　――煙草を吸っている人が狙いを定めてかける臭い息に、火口[25] Z16
75　――若いワンワンの、先が新しくなった血のついた尾[26]
76　――調教の成果が出るとき、暇になる小さな轡鎖[27]
77　――ついに頭が落ちるときの、消えたマッチ[28]
78　――へぼな絵描きが巻きつける、半分平らな、開いたチューブ[29]
79　――機が熟し、ボタンが飛ぶときの、雨傘のゴム[30]
80　――揺り籠をどかしてベッドを置くときの、壁との隙間[31]
81　――わざと吹きかける、残酷な息が届くタンポポ[32]
82　――ボワントをした、キラキラを纏ったバレリーナ[33]
83　――某師が解釈した軽犯罪者の行為[34] Z17
84　――水を撒いている人が渇きに屈するときの、ホースの筒先から噴き出る水[35]
85　――蜘蛛が登り、揺れている糸[36]
86　――緑の敷物の端にある、まっとうな小金[37]
87　――吸い殻の状態になる葉巻[38]
88　――海王星の空に昇る太陽の円盤のように[39])))))、　↑ 5c　↑セリー 3
89　まるで、これまでにも魔法の力が一瞬の好機を選び、
90　たびたび彼に、そうさせたことがあったかのように
91–506 とり違いを。〈とり違い〉のセリー))))　↑ 4b　セリー 4
507　挨拶につけ加える香炉のひと振りを探す一方
508　自分に幸運が巡って来るようにと
509　((((証拠――あとを追われ投獄される、肥えた銀行家[1]　↓ 4c　↓セリー 5
510　――心穏やかに、夜、小枝の笛を吹く盗人[2]
511　――ギニョールにしこたま殴られる署長[3]
512　――右手を前にさし出して進む弱ったサムソン[4]――テュレンヌ
513　正しくも、ザスバッハで最初にひどい目に遭うときの[5]
514　――天国の扉を開く下肋部へのアブサン[6] Z35
515　――びた一文持たずねぐらに帰る蕩児[7]
516　――棺台の横で、ごく少額を足し、端数を切り捨て、引く、
517　たくさんの計画を持っている相続人[8]
518　――呑気に鼾をかきはじめるも
519　オーセールのゲルマヌスの鐘楼を耳にする提督[9]
520　――罠を嗅ぎつけたあと、座して
521　アウグストゥスの友となる陰謀家シンナ[10]
522　――幼きイエスの訪問を受ける靴[11]
523　――ハンカチを投げられたオダリスク[12]
524　――偽硬貨を渡す向こう見ず[13]
525　――穴のなかでライオンを気にかけるダニエル[14]
526　――まっすぐ立つよう説き伏せ
527　コロンブスが未来永劫有名にする、地味な卵[15]
528　――大病人の頭をいささかおかしくするルールド[16]
529　――護送車を手で触る偽王子[17]

530 ――壁のグレートヒェンを見て乾杯をし
531 酒を呷りながら50年を脱ぎ去るときのファウスト博士[18]
532 ――幸せの絶頂にいるコマを急に止める災厄[19]
533 ――ユートピアのために素寒貧になる裕福な発明家[20]
534 ――断固たる印璽が、炙られるのをものともせず、
535 楯形模様を叩きつけるときの、黒い蝋の溜まり[21] Z36
536 ――マスを変えてクイーンになる、前途ある
537 ポーン[22]――コーカサスで鉄に繋がれるプロメテウス[23]
538 ――かわいがられ、煮物になるミシェルかあちゃんの猫[24]
539 ――ロマにものを盗まれる金持ちの子ども[25]
540 ――最後に皇太子妃になる灰かぶり娘[26])))、　↑4c　↑セリー5
541 その輪は休みなく、絶えず翼を回しているが、
542 ――臍の前の、間抜けな男の帽子のように、――
543 どんな主もへつらい、耳を貸すものだ――帽子を持ちあげるものだ
544 客がなにを言い張っても――大金の番をしても　↓セリー6
545 靴直しの睡眠は乱されなかったなどと[1]
546 ――鏡の腹のあたりまでしか背のないこびとが
547 ドルメンの下に立たされた巨人のように見えるかもしれない[2] Z37
548 ――食事が出るとき、サナダムシのホームとなってそれを養っている人を
549 力づくでテーブルにつかせなければならない[3]
550 ――行き遅れの女性がカナリアに対するよりも
551 妻は本能的に夫に対して物腰が柔らかい[4]
552 ――英仏海峡の向こうで「タイムズ」紙は
553 手探りで遂行される、秘められた拭きとりに使われない[5]
554 ――パリで肺結核を病んでいる人が、安静と空気だけで、
555 マントンにいる人よりも早く二重顎になる[6]
556 ――五月、満腹の美食家が、放尿をするとき、アスパラガスに敬意を表し、
557 片眼を閉じながら、鼻の穴を膨らませることはない[7]
558 ――鉢のなかの無知蒙昧な雨蛙は、その気まぐれだけで
559 梯子を採るか、放っておく[8]
560 ――蝿はそこで泳ぐことで
561 そのコップで飲みたいという誘惑を駆りたてる[9]
562 ――水銀が凍りつき、アルコールにとって代わられるとき
563 寒がりは辛そうに襟を立てる[10]
564 ――ミニョンによれば、ミツバチがつねに花から花へと飛んでいる、
565 その国は長靴とは似ても似つかない[11]
566 ――ほかの誰でもなく、テルからであれば Z38
567 臆病者も動揺することなく決闘状を受けとるだろう[12]
568 ――優れた戦略家であるロストプチンが放った火により
569 王たちはより深く頭を垂れた[13]
570 ――自由になった栓が、飛び立つとき、低い天井より、

571 高い天井を貫通するかもしれない [14]
572 ――月がもっと丸く、明かりがどぎつければそのぶん
573 周囲の天体の合計は増大する [15]
574 ――パンの白いところから先に食べるのを避ける術において
575 誰もナポレオン一世には敵わなかった [16]
576 ――女学者の裸にされた欠点は、モリエールの
577 女中を楽しませなどしなかった [17]
578 ――手紙を開ける前、礼儀正しくその許可を請う人に、
579 全会一致の拒否でそれを妨げる [18]
580 ――真珠では白よりも黒の個体が珍しいとして
581 それは黒鶫でも同様だ [19]
582 ――手札がよかったとき、「黄色のこびと」のプレイヤーが
583 親になることなく終えたがる [20]
584 ――心を動かされた人、聖マルティヌスが、自分の上着を
585 一オーヌ分施しをしたのは、ある年の夏だった [21]
586 ――愛において、オナンと同じほどに、なによりもまず
587 「ギヴ・アンド・テイク」の法を通させた者はいなかった [22]
588 ――次の小節線よりナチュラルで
589 臨時記号の効果が消される [23]
590 ――かつて、北風が吹いたとき、蟻は親切にも、
591 すっからかんの隣人に、すべてを与えた [24]
592 ――アッティラが、兄のロドリーグより見事に描かれており、
593 彼よりも、優れたアレクサンドランをふんだんに有している [25]
594 ――二点を結ぶために流れる噂に逆らう、
595 曲線は、直線より短い [26]
596 ――鐘が鳴ると、騒然とした議論がますます激しくなる [27] Z39
597 ――なにより高貴な武器は匿名の手紙だ
598 栄誉への競争においてライヴァルに一撃を加えるための [28] II
599 ――偉大なカリーノが、怒り、手紙を
600 開封することなく屑入れに投げていた [29]
601 あるいは、ミツバチの家にサリカ法があるなどと [30])))　↑ 3c　↑セリー 6
602 カット係が、カチャカチャいわせながら研ぐ二本のナイフが))、Z40 ↑ 2a
603 後ろ前の上着、おでこにフェルト帽――なにも騙せない代物、――から
604 鳥が生まれながらに愚かであるという証拠を [3])、　↑ 1a　↑セリー 1
605 あの灰色の外套、黒い帽子が（その姿は、零から　↓ 1b
606 発した王たちがいた時代を総括し
607 歴史家はそれを飽くことなく調査する)、　↑ 1b
608 切りたった岩のうえで、終いまで身につけていた、
609 その姿をまだ偉大たらしめていなかった時代の、
610 瞑想のなか、一瞬、忘れさせる
611 エジプト、その太陽、その夕べ、その天空を。　↑ 0

Note I.

1	人が、家を建てるのに、水晶しか用いないならば	↓ nI-0	
2	(リサイタルを中断する、親しい幕間のように、	↓ nI-1a	
3	ひとつの註は気を紛らわせ、眠気を少し払ってくれる)、	↑ nI-1a	
4	ひとつならずの中傷を打ち砕くだろう		
5	(そして太陽がついに、庭を明るく照らすだろう！)	nI-1b	
6	とはいえ、どれほどが流布し続けることか！		
7	なかでも、ああ！　こう言い張る中傷が		
8	(その幼年期でさえ、異論の余地なく、	↓ nI-1c	
9	古き人類がその背中を決して見ることはなかったにもかかわらず)	↑ nI-1c	
10	月は（すべてが静止したその世界、	↓ nI-1d	
11	そよ風も吹かず、火山がジャグリングもしない、		
12	私たちが爪の根元に、その控えめな肖像を持っている世界		
13	――それがそれとしてなんの役にたっているのか訝しむこともない――		
14	((だが、砂漠でわれわれを欺き、	↓ nI-2a	
15	飲み物と釣りの希望を持たせる湖はなんの役に？		
16	震えずには帯を裂けない		
17	電報を見るときの身震いはなんの役に？)) Z14	↑ nI-2a	
18	縮小されているが、よく似ていて、		
19	特に親指が呈するお飾りとして、		
20	種子も芽吹かない強情な世界、		
21	なにせ地表に、水に必要なものがまるでないのだから		
22	――そこには、筏で祈る遭難者もおらず		
23	フィニステールという名を冠する郷もない――		
24	洗礼を施すため、絵を描くため、あるいは浣腸をするための)	↑ nI-1d	
25	ひどく臆病な衛星としてふるまうなどという[1]。	↑ nI-0	

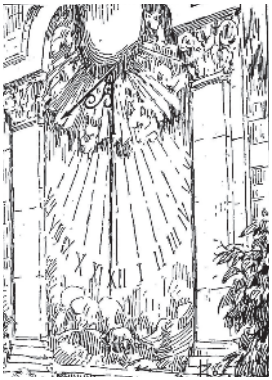
Note II.

1	どれほどの繁栄や、どれほどの確たる幸福が	↓ nII-0	
2	見る人が見れば、汚い出所を持っていることか！		
3	女にとってピアノの賞は		↓セリー 7
4	審査員のなかにいる情人の数次第である		
5	ソナタを弾きながら彼女が示したりしなかったりする		
6	初見の演奏や、円熟した才能ではなく[1]		
7	なんとかレ＝バンの多くは重炭酸塩よりも		
8	夜、足繁くカジノに通う遊び人のおかげで栄えている[2]。	↑ nII-0	↑セリー 7

Z12　案山子（古着と古帽子が掛かった十字）。人物なし。

Z13　ひとりの信者に灰を授ける聖職者。

Z14　電報の封を破る女性。不安げな表情。



Z15　正午数分前を指す日時計。

Z16　火を消すため、火口に息を吹きかけている喫煙者。

Z17　弁論している弁護士。荒々しい仕草。

Z35　うっとりしはじめているように見える酔っ払い。ほかに人物なし。

Z36　封蝋の溜まりに印璽を押しつけている、品のよい服装の男。

Z37　平均的な背丈の男の横に、その腹のところまでしかない小柄な男。二人とも大きな鏡の前でこちらに背を向けており、鏡がその姿を映している。身長を比べようとしているかのよう。

Z38　息子の頭のうえに置かれた林檎に狙いを定めているウィリアム・テル。ほかに人物なし。

Z39　騒がしい議会。演壇で議長が鐘を振っている。

Z40　鶏を切り分けるため、手にした二本のナイフを十字にしているレストランの給仕。ほかに人物なし。